

「掌当て」の体験

「気」の現象学をめざして

藤崎 康彦

「気」の交流へ

本誌第四号の拙稿「からだ・ことは・文化」において、私は「合掌法」によって得られた「気」の体験を記述し、文化研究に身体性を導入する視点を示した。小論は、「気」の現象につき前回とは異なる観点から記述し、理解を深めようとするものである。前回は、自らの内部の感覚を手懸りに、「気」を「発見」あるいは「認識」したことについてであった。掌の中に確たる存在感を感じさせた「気」ではあっても、私が記述したところはあくまで自らの身体の内部的感覚的経験に限られていた。ところが合掌法によって敏感になった掌は自らの境界を超えて、外界（周囲）と交流し始めるのである。昨年は書かなかったが例えば私は次のような経験を既にしてきた。

ヨーガ教室の友人が骨の病気になって手術を要するので、ある大学病院に入院したことがあった。見舞に行つて私は友人にこの

頃「気」に凝っているという話をした。「気」が集まるようになった掌は敏感になり、相手に掌をかざすとその温かさや冷たさで患部なども知ることができるようだとも話した。では隣のベッドにいるおじさんのどこが悪いか分るか試してみようと友人は言う。興味深そうに聞いていたおじさんも乗り気である。私は自信はなかったがやってみることにした。おじさんはベッドの上にあおむけになって、毛布をかけて横たわっている。毛布は確か一枚ではなかったか、かなり厚いものであったかして、見たところ直接触れたとしても分かるかどうか疑わしかった。私はおじさんの胸のあたりから腹部、右脚、左脚と右掌をかざしてみた。毛布から約三〜四センチ離してゆっくりと滑らかに掌を動かしてゆくのである。微かであるがしはつきりと冷たく感じる所がある。二度程行って確かめた上で、私は右下腹部と右膝を指で示した。おじさんは、大袈裟ではなくベッドから転り落ちそうにして何でそんなことが分るのかと声をあげたのである。友人の説明によるとお

じさんは背骨の一部に重い病を持っているらしい。難しい所なので手術は背側からでなく開腹して腹部から行わなくてはならない。背骨の病の症状が腹部と右脚に出ていて、私が指摘した正にそこが病んでいるのだという。

この例に限らず、掌をかざすと甚しい時は、相手にスッと熱を奪われてしまうような感じで、ひどく冷たく感じることが、他の場合でもあった。掌から何かが相手に吸い取られ、掌から相手の方に冷い風が吹いてゆくように感じたこともあった。このように、掌の感覚は相手について様々な経験を与えてくれる。相手も私の掌から温かさを感じていることがある。掌を当てたりかざしたりすると相手と交流・交感が始まるようだ。

「掌当て」

掌を通じての他者との交流として、病氣治療が昔からあった。痛いとか苦しいとかの症状に対し、人が掌を当ててくれているだけで苦痛が柔らぐことは唯しも経験的に知っていることである。「手当て」と医療とが同義であることにも、我々の日常生活の体験が反映していると見て良いだろう。このようなことから、小論では、私が経験した「掌当て」(「手当て」は比喩的な意味も持つ)ので、文字通り「掌を当てる」行為をこう表現することにしよう。について、関連する現象も含めて詳しく記述することを主とし、それを「氣」のモデルで検討することを従とする。

「掌当て」の経験について記述する理由を別な面から述べておきたい。前稿では追体験可能な方法を記しておいたとはいえず、その合掌法を行って生じて来る感覚や現象は、基本的にはその人の

ものである。今回は、「氣」の交流・交感とそれに伴う諸現象と思われるものを記述する。それは掌を当てる主体の外部に一つの効果として生ずるもののように思われ、もし第三者がその場に立ち合っていたら第三者も確認できる。そうでなくとも少なくとも相手の証言を得ることができる。掌を当てる側の体験と、掌を当てられる側の体験、及び関連する現象の観察をつき合やすことで自己の感覚にのみ閉ざされずに考察を進めることができる。

現象の記述について

もう一つ方法論上の配慮を述べておきたい。生ずる現象を記述する、即ち体験したものを言語化することこそを研究上の主たる方法とする点についてである。

「手当て」を用いた病氣治しは、古来様々な例が知られている。「ロイヤル・タッチ」といわれているものもそうだし、心霊治療の一部もそうである。多くは宗教的・神秘的な奇蹟としてその効果が語られている。現代の日本でも掌から特別な力を出して病を治すことで信者を得ている宗教的団体があるようである。私の伯母の一人もそのような人から掌を当ててもらったことがあると言っていた。又、店の棚には、奇蹟の治癒の記録も収めた本が沢山並んでいる⁽²⁾。しかし、オカルティズムへの興味からではなく、掌を当てると言う行為の一つの記録としてそれらの本や証言を検討する時、問題が多すぎることに気付く。その一つは先ず記録として不完全であることだ。人類学的な観点からすれば現象の記述は詳しい程良い。最初は何が意味あることか分らないが故に気のつく限り何でも記録し、そこからモデルを作ってゆく方法を我々は

とる。例えば先述の伯母は、信じたくはないのだが、本当に具合が良くなった、あれはいったいどういうことか、と私にたずねたことがある。この時、私は何とも答えようがなかった。今その時の体験を問い直しても、本人も概略しか思い出せないだろう。そのような乏しい情報からは、何か考えてみようもないと思える。その時、細大もらず記録しない限り、後から情報が増えることは余りない。従って、先ず言語化を目指すという時、仮説（モデル形成）をデータに基づいて検討できるような、データとしてまともな記録を得たいということなのである。

もう一つの問題点は、今述べた問題点と密接にかかわっていることだが、多くはある「力」を人々に信じさせるために奇蹟的な治癒の例を示しているのであることだ。その力は宇宙の根本的な原理であったり霊界から与えられたものであったり様々であるうが、要すれば力がア・プリオリにあり、その証拠として事例が持ち出されてくる。当然のことながら、我々はその逆を行おうとするのである。

現象を記述することを優先して、様々な測定器具を用いた実験的研究についてはしばらく扱わないことの意味も、方法論上の配慮の観点から説明したい。前稿で明らか通り、身体に一定の技術で操作を加えた時（その技術は例えばヨーガであり鍼であり指圧であり呼吸法であり瞑想でありその他様々なものであり得る）、どのような現象を体験するか（それは病気の治癒であったり、意識の変容状態であったり不思議な身体感覚であったり、様々なイメージの出現であったりであるかも知れない）を人類学の課題として探究しようとするのが私の立場である。身体、技術及びそ

れに結びついていると思われる様々な現象と、個々の集団の生活世界としての文化とは密接な関連があると思うが故に、身体、技術が文化研究の課題となり得るのであった。とするなら、探究すべきは身体、技術とその現象であって、「気」ではない。「気」は体験された現象を了解する「モデル」であって、「気」の存在をア・プリオリに前提にすべきものではない、私にとってはない。

「気」について実験的研究をすることをしたら、既にして「気」を前提にして、「気」が存在する（或はしない）ことを実証的に証明することとか、「気」とは何かその実体を解明することとかの発想になるであろう。実際、現在行われている実験的研究のいくつかはそのようである。これは、私にとってはもうしばらく後の段階と考える。単に現在私が器具とテクノロジーを有していないというだけのことではなく、もう少し積極的な意味付けで、これらの研究は参照しておくことにとどめておきたい。

「掌当て」の事例

多少なりとも身体に不具合が生じている人に、「掌」を当ててどのような現象が生じたかを観察した事例をいくつか記述する。掌を当てられた相手について書き、掌を当てた主体である私の経験については、後程まとめて述べる。事例の人物の年齢は昭和六一年八月現在のものである。又、事例一、二は同じく昭和六一年のことである。

事例一、二八歳の女性。つわりで苦しんでいる。八月末現在で妊娠一九〜二〇週位である。仕事（事務）上の腕の疲れの治療、及び一般的な健康管理の目的で、これまで経絡指圧を一〜二ヶ月

に一回ずつ受診していた。妊娠したので指圧では強すぎるのか痛く感じるので、治療者と相談の上、もっと温和な方法をとることにした。指圧師によって「掌療法」とも「愉氣」とも言っていたが、掌を背中に当てればつわりの苦しさが軽減する筈であるので私がやってみることにしたのである。七月の中旬頃から開始した。漢方も治療にとり入れている病院の産科で、つわりの時家族に掌を背中に当ててもらおうように指導された友人を持っていたり、指圧治療の過程で「氣」にもなじんでいたせいで、本人は「掌療法」或は「愉氣」についての動機付けは持っていたようである。

「掌当て」は相手にうつ状態の姿勢或は横たわった姿勢をとってもらい、着衣の上から背中を中心に掌を当ててみて冷たく感じる所や、本人の訴え（苦しいとか冷たいとかの何らの異和感）が掌を当てた時にある所を中心に行う。自然に掌を置くだけである。時間はこの事例の場合四十分から一時間位かかることが多かった。指圧師からは施術部位について示唆はあったが、余りこだわらず、試みに掌を当てて手応えのある所（その内容については後述する）を優先した。本人は「掌当て」を始める前は、夜は一〇時頃になると相当気分が悪くなり、胃液まで吐いたりしていた。つわりとしてもかなり重いのではないかと思われる。ただ、食欲はあり一度に沢山は食べられないにしても、少しづつ回数多く食物を摂っていた。空腹になると不快感が増すので、それを防ぐためもあるらしい。また就寝前に一度吐いて少し気分が軽快しても、夜中に再び悪化し、一度は必ず目が覚めて吐いたりしていたようである。つわりそのものに加えて睡眠の障害で心身ともかなり消耗していたようだ。又この頃手の甲などがかゆいと言っていた。

赤い発疹が出ていた。

「掌当て」を始めて一週間から十日位、延べ回数にして、三四回位でいくつかの改善がみられた。赤い発疹がきれいに直り、これが「掌当て」に注意を集中する契機となったのだが、その前に先ずつわりに対する効果について述べる。つわりに対しては一回目からそれなりの効果があった。胃のあたりの苦しさがあっても背中に掌を当てているだけで（早ければ五六分もすれば）楽になる。実は初めはそれ位の効果しか期待していなかった。しかし朝起きた時の状態が違うことが分って来た。「掌当て」は就寝前に行っていたのだが、その後は熟睡して明け方まで全く目が覚めることがない。熟睡して休息できるので、かなり身体が楽である。と本人の報告があった。つわり自体は目覚めた後、時間によって、又空腹の加減によって症状が出るらしく、朝食前などに再び気分が悪くなったりするのだが、熟睡できることは助かったらしい。苦しさを一時的に軽減するだけでなく、もう少し深い効果が「掌当て」にはあるらしいと思いはじめた頃、かゆい赤い発疹が消失していった。この時、同時にもっと大きい改善のあったことに気付いた。赤い発疹の他に、数ヶ月前から頑固な皮膚病が右前腕と左ふくらはぎに生じていた。小さな発疹が密集して（面積はそれぞれ小指のつめの大きさ位）その発疹の内部には膿が生じていた。かゆみもあって、困っていた。市販の皮膚病用軟膏を何種類か用いたがほとんど効果はなかった。ところが前述の如く数回の「掌当て」でその頑固な皮膚病が全く消失していった。妊娠が確認されて以来、薬は一切用いていない。

「掌当て」の、自覚された効果についてはこれ位にして、次に

「掌当て」時に相手に生ずる、様々な感覚・及び外から観察可能な現象について述べる。本人の感覚としては、先ず当ててもらっている掌の温さが心地良い。その温さがぼろっと周辺に広がる感
じである。時として掌が身体にめり込んで来るような感覚がする。

「氣」（前述の如く「氣」の概念にはなじんでいるし合掌法も経験したことがあるので、話の中にも出て来るのである）を吸い込んでいるような感覚がある。手指の先などがチリチリ・ビリビリして「氣」が流れている感じがして来る。手の甲などがかゆくなる。足先にも同様の知覚が生じ脚全体が温かくなる。時として温かくて汗ばむこともある。顔面がかゆくったりする。そのうち腕や指先、脚などの筋肉の一部分が不随意的にピクピク痙攣してくる。次第に意識がもうろうとして来て、夢の中で唯かと話をしているような気がしてくるが、視覚的イメージは、夢と異り生じない。一方で寝込んではいけないという気がして、意識の中でもう一人の自分が見ているような感じになるのだが、最終的には訳が分からなくなって寝てしまう。指圧を受けているうちに寝込んでしまうのと同じ状態である。

このような状態をたどっている時、外から観察していると次のような現象が生じている。段々意識が薄れて来るのは会話の様子などから分るが、それと並行して本人の知覚にもあった通り、手や腕、脚の筋肉が部分的にピクピクと動くのが観察できる。更に「掌当て」を続けていると突然身体全体がピクリと大きく動くことがある。一回でなく何回か生ずることが多い。あたかも背骨に下から上へと電流が走って、その電撃で大きく痙攣したかのようである。背骨から上肢の末端まで波動が伝わり、大きく動く。そ

の時、手をみると、親指の付け根のふくらみなどが強く収縮してピクピクしているのが分ることもある。このような経過をたどって、外から観察できる現象が収まると「掌当て」の効果があったと判断して、しばらく様子を見て終了する。先述の如く、終了まで大体一時間程度かかることが多い。終了時、気がついて目覚めることもあり、そのまま寝入ってしまうこともある。横臥姿勢の場合、そのまま眠ってしまうことが多く、そういう時非常に熟睡しているらしく、終了時の姿勢のままですべて全く身動きすることもなく、四五〇分は眠っている。寝返りをうったり身動きしたりするのはその後である。

本人に聞いてみると、身体が大きく痙攣するような現象は全く知覚していない。この現象が生ずるのは、意識がなくなっていることと考えられる。通常意識状態から、何らかの変化した意識状態を経過して最終的に入眠しているようだが、ここでも通常の入眠とは少し質が異なるようだ。本人の報告では次のような差がある。通常の入眠の場合、自分の身体のままの意識はある。床の中で次第に眠くなって、いつの間にか意識がなくなる。これに対して「掌当て」の場合、先ず身体がゆるんで来る。足や手がしびれ身体がだるく、身体全体がズブズブに溶けて、あたかもふとんに溶け込んでしまうかの如くにまとまりがなくなる感じがする。そのような経過を辿ってわけが分からなくなる。イメージという、通常の入眠はストンとそのまま(眠りに)縦に落ちる感じであるのに対し、「掌当て」による入眠は横揺れしながらだらしなく溶けてしまうような感じであるという。入眠は、「掌当て」をするような時は既に眠くなっているから生ずるのだということだ

はない。普通の覚醒状態で、本を読んだりして眠いとは思っていないような時でも、「掌当て」をして、いわば「効いた」時には入眠してしまうのである。

最後に、妊婦であるが故の特異な現象と思われることに触れる。八月以降は腹部に手を触れると、子宮をはっきりと知ることができ、る位になっていたが、何回か子宮を指して、腹部に「掌当て」を行ったことがある。この場合、ただ掌を置くだけでなく、意識的に自らの呼吸に合わせて（呼吸の時に）掌から腹部の胎児に「氣」或は温いエネルギーが注ぎ込まれるかの如くにイメージを保って行うのである。むしろ「愉氣」と言うべきかも知れない。私が指導してもらっている指圧師の一人で野口整体などに詳しく、自分の妻の妊娠中に腹の中の子供に語りかけながら腹部に愉氣をしていたという人の話を聞いて、試みてみたのである。

愉氣する側としては、そのとき他の部分と同様の手応えがある。つまり生体と「氣」の交流を行っている実感（これについては後述する）がある。ところが愉氣される母体の側は全く異った知覚をしている。背中や体側など腹部以外の所に愉氣されると「氣」をもらっている実感があり、身体中に温さが広がり、前述の如く様々な反応が自覚できる。これに対して腹部の場合、確かに温い掌が当たっているな、程度の感で、我身にひびいてくることがない。ちょうど湯タンポカカイロを当てているようなもので、何かよそよそしく、自分とは無関係な感じがするらしい。いわば子供が氣をもらっているのであって、自分とは関係のない現象であるかの如くに感じているようだ。この差ははっきりとした感覚であるという。

事例二、六四歳の女性。背骨が骨粗鬆症になり、腰と下肢の痛みに苦しんでいる。高血圧症でもあり、首筋、肩、背中の筋肉の凝りが出易い。背中の中程から腰骨にかけての背骨は骨粗鬆症のため変形しているらしく、その部分が窪んで見える。変形した骨が神経を刺激するのであろうか、常に脚の深部が痛く、寝返りなどもうてないことがある。疲労にも関係するらしく、重いものを持つたり長時間立ったり歩いたりすると、痛みや苦痛はその後増すようである。そのような時、膝から下の部分にむくみも生じ易い。これに対して就寝前に私が行う経絡指圧がかなり効果があり、苦痛を軽減することができていた。指圧を施術できない時は、経絡体操を行い自分で苦痛を軽減する努力をするよう指導しておいた。しかし最近（昭和六一年春から夏にかけての頃）は痛みがひどく、殊に胃脘伸展の体操（正座の姿勢で床に座り、徐々に上体を後に倒し、膝を正座の姿勢を保って折ったまま上半身を床に平に伸ばす。掌は組んで頭の先に腕を長く伸ばして、身体の伸展を助ける。下腹部から鼠蹊部を通じて腿の前面から膝頭にかけての胃脘が緊張していると、スジがつったような状態となり、膝頭が床から浮いたり左右揃えて膝を互につけられなかったりするものである。）が苦痛で、左右の片方ずつしか膝を折って身体を伸ばすことができない状態であった。

このような状態であった八月末頃、三月月ぶり位に指圧を施術した際、「掌当て」も行ったが、非常に顕著な現象を経験した。この時約一時間位かけて、背中や脚を重点的に、全身を指圧した後、うつぶせの状態で、背面の重要と思われる所に掌を当てて、温めるような感じでしたばらく様子を見ることにした。肩甲骨や背中に

掌を当ててもらっていると温かくて非常に心地良いらしい。事例一と同様にやがて手や指などがかゆくくなって来るようだ。やはり眠くなってしまいが、眠ってしまってもいいのだろうかと思つて、心理的に抑制を働かせるらしく、完全に眠ってしまうことはないという。

肩甲骨や背骨に掌を当てた後、腰のあたりの背骨の病んでいる部分に当てていると、右の掌の真中あたりから、ポコポコと何か泡とも気体ともつかぬものが（あたかも音を立てて）相手の身体に吸いとられていくような、強い手応え（反応）があった。何事かと驚いたが、「気」が流れてゆく現象であるかの如くに感じて興味深く、その現象がどうなるか感じるままにしておいた。しばらくして（せいぜい一〇秒〜二〇秒位のものだったと思う）掌に感じられるものもなくなり、いわば現象が収まったように感じたので、自然に掌を離れた。この間、相手は眠り込んでいてこの現象についての知覚はなさそうであった。掌を離れた後、相手の腰を中心とする痛みと運動制限は大幅に軽減されているに違いないと（何故か）確信することができた。試みに相手を起こして胃経伸度の姿勢をとってもらった。施術前の訴えは、腰の痛みとこの姿勢を取る時の苦痛が主たるものであったからである。実に簡単に上体が後に倒れ、痛みも姿勢上の無理もない。翌日も爽快感と苦痛の軽減が感じられたようなので、全身的な効果があったのであろうが、殊に腰と脚の苦痛の改善が得られたことが大きかった。

「掌当り」の感覚

「掌当て」をしている私の感覚・知覚について述べたい。「掌

当て」をして先ず感じるのは掌を当てている部分の温さ・冷たさである。事例一の場合、経験的にどの辺が冷たく感じ易いか、分るようになってもその日ごとと異なっていることが多い。とにかくその日に冷たく感じる所に掌を当てようとした。しかし背中でどこが冷たいかはつきり分らないようなことが、八月末頃多くなつた。本人の症状は全般に軽くなっている時である。その場合、背骨の上部と下部にそれぞれ左掌右掌を当ててしばらくして再び背中をさぐると、今度ははつきり分ることが多かつた。今まで潜在していた図柄がはつきり浮び上つて来たように、温かさ・冷たさが分るのである。

冷たい所に掌を当ててしばらくすると、私の掌から腕にかけてビリビリ・チリチリした感じが生じて来る。更にしばらくすると余り感じなくなる。場合によつて、非常に強い感覚が生ずることがある。事例一で経験したことだが、八月末頃、横臥姿勢で体側の肋骨付近に掌を当てていた。最初掌先のビリビリした感じだけであつた。相手が、ずい分反応があると、自分の知覚を報告した。ビリビリした感じ、温さ、何かを吸い込むような感じ等々が、強く広範囲に感じられたのだろう。このようにこちらの掌の感覚と相手の感覚と一致することはしばしば生ずる。それからしばらくして（一分はかかっていると思う）私の右肘のあたりが鈍くだるく重くなりしびれたようになり、腕の内部の圧迫感を感じ苦しくなつた。この感じは掌から肩近くまで腕全体に広がっていたのだが、感覚の中心が肘にあるように感じられたのである。掌が相手の身体に吸いつけられたようにも感じる。力が脱けてしまい、気力をこめて動かさないと、もう腕を動かすことすらできないか

の如くになった。自分の身体の一部ではなくなったような異和感も腕に対して感じた。しばらくしてだるさは和らぎ、掌も自然に身体から離れた。何とか腕を動かしたいと思っても動かず、ある時点で自然に動いたという感じである。残念なことに自分の感覚に注意を奪われて、この時どのようなことが相手に生じていたか確かめておくことを忘れた。このようなだるさの軽いものは何回か経験していたのだが、これ程強い経験は初めてだったので、少し驚いてしまったものらしい。翌日にも同様の経験をしたが、この時も自分の感覚をより詳しく弁別することに集中し、相手への配慮を忘れた。この時分ったことは次のようなことだ。だるく感じる時は、腕が非常に強く緊張しているのである。筋肉が収縮して力が入っているかの如く感じがする。自分では意識して力を入れたりはいないのだが、不随意的に腕それ自体が力を入れているように感じる。同じ姿勢などを続けて腕や肩が凝ったりだるくなったりする、その感じに似ている。勿論「掌当て」の時同じ所に長時間当てているわけではないから、姿勢が原因でだるくなつたのではない。

又、別な時、次のような現象が生じた。やはり腕のだるさは感じていたのだが、今述べた時程ではない。むしろ、自分ではそのようにしようとして決して意識はしていないのに、掌が相手に強く押しつけられてゆくような感じがした。この時、やはり右腕が非常に細かくビリビリと内部から震動しているのである。この震動は腕自体にも感じだし、目でみても分つた。今ここで意識的に腕を震動させようとしても、肘や肩の関節を中心に細かく振ることが出来るだけである。そうではなくて、この時は腕の筋肉組織それ

ぞれが細く震えて、腕全体は固定されていても掌から肘の部分がそれ自体で震動していたのである。これについては後程再び考えたい。事例一でこの現象が生じた時、相手は眠っていて相手の感覚は確かめられなかった。

理想としては細大もらさず自らの体験を吟味すべきだがきりがなくなるので、二点だけ重要と思われることを記録しておく。

一つは「掌当て」をしていると汗をかくことである。別に部屋が暑いわけでも体を激しく動かしているわけでもないのに、掌を当ててしばらくすると汗ばんでいることに気付く。汗をかく場所は部分的で、額にかくこともあるがそれは少なく、みぞおちのあたり、背骨の周辺、仙骨のあたり、腿の内側等が多い。事例一の所でも触れたが、掌を当てられている方も汗をかくことがある。足先からポカポカとして来てかゆくなり脚全体が温くなって、やはり腿の内側が汗ばむことが何回かあった。

もう一つは、掌を当てるだけでなく、直接は触れずに「かざす」だけでも効果があることである。初めからかざすだけで試みたことはないが、掌を当ててかなり反応が出てから、かざすことに替えてみても、相手が感じている感覚には変化がなく事例一で述べたような反応が持続することは確認した。また、掌でなく指先を当てるだけでも同様であることも試してみた。肩甲骨に「掌当て」をしばらくした後、肩甲骨の真中のツボ（天宗）に中指を当てるだけに見たところ、反応が持続することを、やはり事例一で確かめた。指の場合は自分の感覚としては特に何も今のところないが、掌をかざす方は当てるのとは別の感覚がある。掌と相手との間に熱を感じたことがあった。相手に掌を当てている

場合は自分の掌の温さを感じることはないが、かざしてみると指の間や掌に自分の掌の温さを感じるような気がする。或は掌と相手との間にモヤとした熱気を感じたのかも思える。この時相手は掌を当てられていた時と同様の温さを感じ反応も持続していることは確かめた。

検 討

掌を当てられる側、当てる側双方の体験を整理し、広い脈絡の中でその意味を検討してみたい。先ず「掌当て」される側について考える。事例一、事例二、それぞれの所で書き落した共通の現象について補足したい。どちらの例も掌を当てていたり、指圧をしたりすると、呼吸に顕著な変化が生ずる。ある時、フーッと深い息をし楽々とした呼吸をし始めるのである。ほとんどは、入眠時や多少なりとも意識が変化した状態の時であるので本人の自覚はないことが多いが、時として呼吸が楽だと報告をうけることもある。横臥姿勢の時など、浮肋骨の下の細腰の部分が大きくふくらみ目にもはつきりと腰が太くなるのが分る。深い腹式呼吸になつて横隔膜が大きく広がっているのである。観察が不十分でこの呼吸の変化と他の顕著な現象の時間的關係は、記録していない。しかし他の、例えば身体に様々な運動が観察できるのと、大きく時間はずれておらず、そのしばらく前に生ずるかほぼ同時位と思う。

身体論に関心を抱く人にとって、呼吸という現象の重大さは良く知られている。基本的には自律神経の支配を受けていて意志を働かす必要のないものでありながら、意識をそれに向けてことで

殊にイメージを用いて誘導したり、或はヨーガのような特殊な肉体的訓練を積んだりすることで、かなり制御できる興味深い現象が呼吸であるからである。とするなら、掌当ての結果から次のように考えられる。つまり掌を当てると、通常の意識のありようの時に呼吸を支配している自律神経の働きが変化し、深い腹式呼吸の状態を出現させるということだ。要すれば掌を当てると自律神経の働きに変化が生じるのではないか。⁽⁷⁾

そのように仮定して論を進めると、次に注意をひかれる現象は掌を当てていたり指圧をしたりすると、相手の意識が多少なりとも通常の意識から変化するらしいことだ。事例一も事例二も結果的に眠ってしまったっているから、要すれば心地良くて寝てしまふだけのことだと思われ易い。殊に指圧の場合は、筋肉への圧によって緊張がとれ、肉体的心地良さを味わって眠ってしまうのは当然だと素朴に思つて、眠ってしまうことの意味を考えないかも知れない。これに対して「掌当て」では、筋肉やスジへの加圧など一切ないのに眠ってしまうのに注意すべきだ。しかしこの場合でも掌による「温かさ」という肉体的心地良さを味わっているともしえる。しかし更に、本稿では扱わなかつたが私が経験した鍼治療の場合、肉体的心地良さと思えるものは何もなくともやはり指圧と同様の経過をたどつて眠ってしまうのである。従つて肉体的心地良さとは無關係に何かによつてこの現象が生ずると考えておく。この現象について理解しておいて欲しいもう一つのこと、私が意識が変化するようだという時、基本的に睡眠とは關係がないことだ。覚醒状態で、かつ通常の意識とは異なる状態を私は想定しているのである。これについて、次の事例を参考にしたい。

事例三、三歳の女性。主たる不具合は両手首の筋違いである。親しい友人家族と共通の知人の家に居た時、友人の娘の遊び相手をしていて私の扱いが乱暴であつたらしく、手首が痛いとペソをかき始めた。手首を柔かくもんで振り、筋の修復を行った後ついでにと腕などを掌で大きくにぎるようにして指圧を試みた。不思議なことに全く嫌がらずむしろ好むように見えたので、掌圧に簡単な運動法を加味して二〇分程行つた。子供であるので掌で軽く圧したりにぎつたりするだけなのだが、何かに耐えているような感じで大人しくしている。不思議な状態で、大人のように刺激を心地良がつて楽しんで静かにしているのでは勿論なくさりとて、痛みに耐えて歯をくいしばっているのではない。この位の子なら痛ければ嫌がつて決して大人しく指圧などさせておく筈はない。むしろ掌を当てられて独得な感覚に捉えられて動けなくなつていたのでないかと思う。

その独得な感覚とは次のようなことからある程度推測することができる。圧を加えると（というより掌を当てるともう既にそういう状態になるように感じるが）あたかも動けなくなつたかの如くに非常に大人しく圧を受けている。圧によつては「ハーッ」と音をたてて深い息をつきながら耐えている。周囲の大人達の様子など目にも入らぬし耳にも入らぬ感じで、注意のあり方がそれまでとは異り、内面の身体の感覚に集中しているかの如くである。眼は大きく見開かれているのだが、意志をもつて動かすことができず、何を見ているのでもなくただ見開かれたままのようである。腫も大きく開いているので大きくなくて、彼女の内面に向けて開かれた大きな穴のように感じられる独得な眼になっている。も

し何かを見ているとしたら無心に世界そのものを見ているのではなからうかと思わせるような深く黒々とした大きな眼である。

このようなことから考えると、身体の感覚に圧倒され麻酔にかつたかの如く身動きならなくなり、意識もほとんど周囲とのかわり（交流）を失ってしまったのではないかと思う。それまでおしやべりだったのが一言も発しなかつたことから、遊んでいた時の状態からこの時の状態への転換が印象深く感じられる。

また指圧が終つた後は蘇つたかの如くに元氣にとび廻り始めたので、その対比が一きわ鮮やかであつた。見ていた大人達も、子供は普通おさえつけられて自由を奪われるようなことは嫌がるのだがと不思議がつていたが、母親はこれに関連して次のように語つた。この子は幼い時（言葉も自由でない時）から、就眠する時足を指して足先にさわつてくれるよう要求する子であつた。足をさすつたり、にぎつたりしてやると快がつて、安心して静かに眠るのであつた、と。付言しておくこと、事例一・二で生じた、身体の痙攣様の、電撃が走つたような胸震いは、やはり生じた。むしろ大人より遙かに早く生ずる。

議論の本筋に戻ると、要すれば最終的には眠り込むことはあるが、様々なレベル、多様な状態において、意識の変化が、指圧や「掌当て」や鍼によつて生ずると想定しておく。

次に顕著な現象は、三例に共通して見られる痙攣様の動きである。これは身体全体を走るように生ずるものと、局部的に生ずるものの二つがある。これは顕著ではあるが、私には良く分らないものである。先ず局部的に生ずる筋肉のピクリとした痙攣様の不随意的動きは指圧でも「掌当て」でも生ずるが、ヨイガを行つ

ても氣功法を行っても生ずる。規則的にヨーガを一定期間行っている時、ヨーガの最中にも、またヨーガではなく他の生活をしている時にも頻りに腕や背中等の筋肉がピクリと動くように感じるので私は経験している。外から見ると、皮膚の一部が痙攣しているのが分るが、内部感覚としては仲々言語化しにくい。皮膚に近い、筋肉組織の浅い所を何かが速いスピードで通り抜けてゆくように感じることもある。

背骨に電撃が走ったかの如くに身体全体がピクリとそり返る大きな動きは、そのほとんどは意識のない状態で生じているので、身体感覚についての証言を得ることができない。私自身も指圧治療を受けている時、この現象が生じていたと指圧師から教えられたが、やはり眠っていたらしく自覚がない。ただ実感として治療効果と関係があるように思う。事例一でも、「掌当て」が良く「効い」て相手の症状が軽快するような時、この現象も生じていたことが多くように感じる。経験的にこの現象が出ると、翌日の状態は改善されるだろうと判断していたが、大体妥当な推測であった。ただ、「掌当て」を始めた初期の頃より、回数を重ねた後期の方に多く生じていたように思うので、やはり良く分らない。頑固な皮膚病の消失という劇的な成果は初期に生じているのである。

次に「掌当て」する私の内部の現象について考える。何よりも注目しなければならぬことは、掌を当てた時、私の掌から腕にかけて生ずるビリビリ・チリチリした感じだ。これは合掌法をしている時に感じるものと同じである。私は前稿において、それを「氣」が流れている、として了解した。全く同じ感覚が生ずる体験からして、私が掌を当てる時、私の身体には「氣」が流れてい

ると仮定せざるを得ない。これはまた掌をかざした時の感覚からも分る。合掌法の時、向い合わせた掌の間に温かくもややしたものを実感する。掌や指にまとわりつく温かい空気があるようだ。これと同じものを掌をかざした時に感ずる。

そして、掌を当ててもかざしても、相手には指や手の甲や腕やその他の所にビリビリ・チリチリした感じやかゆみなどが生ずる。「氣」が流れている時と同じ感覚である。これは私にとっては対象である人の証言であるが、私自身も指圧や鍼治療を受けていた同様の経験をしているので、相手に生じている感覚と私が経験したことのあるそれとは同質であると了解できる。とするなら、掌を当てたりかざしたりすることで、自分と相手との間に同じ「氣」の流れる感覚が生ずることになる。私が合掌法を行った時、その流れの感覚は、私の閉じられた身体内部に限られていた。しかしここでは自他の間にあたかも「氣」が交流している如くに、明瞭な現象が生ずるのである。

私はここで、「掌当て」の時に、「氣」が流れると仮定する、というより実感として認めようと思う。私が掌を当てている時感じていたものは、相手と「氣」の交流をしている感覚なのである。すれば当然次には「掌当て」の時生じた様々な現象を「氣」が交流する、「氣」が流れる、ことに伴う現象として了解できるかどうかが問題になる。例えば掌を当てている時に感じた腕のだるさや震えなどは、私には「氣」が流れているが故に生ずる現象であると実感できる。「氣」が流れるからだるいのではなく、強く流れるのを制御するために腕の組織が強く緊張するからだるいのではないかと感じられる。この緊張が強くなると震えが来るのでは

ないか。しかし細かな運動は「氣」が流れることそのものに伴う現象で、氣の流れを制御するための緊張ではないかも知れない。中国の氣功の達人が氣功法を行っている時、顔などの皮膚が細かく小波を打つように震えているのを経験したと氣功法の師、星野稔氏が語っておられたので、この辺は安易に理解をしない方が良いと思うので今後の研究課題とする。

ただ、腕全体があたかも熱の良導体になってしまったかのような状態については付言しておきたい。「掌当て」を続けていると、熱いものや冷たいものに触れた時の感じがそれまでと異なって来た。氷に触れると一挙に腕から肘まで冷たさの感覚が走る。手ではなく肘で冷たさを感じると言っている位位の鋭さである。それまでは指や手に冷たさを感じて、しばらくして手首のあたりに冷たさを感じる程度である。氷など数秒以上触れることはないから、そこまでの経験しかない。ところが「掌当て」を続けていた頃は本当に手指が冷たく感じるのと同時に腕や肘まで一気に冷たさを感じたのである。殊に肘は痛かった。手指に触れた冷たさが一気に腕を通り抜け肘に衝突したかのように鋭く感じる。これは熱さでも同様で、熱い茶わんなどを持った時あわてて耳たぶに触れたりするクセが我々にはあるが、そんなことでは間に合わない。触れた途端に肘まで痛くなるのである。

肘（右肘であるが）は私の弱点であるらしく、前稿でも「氣」が「ひっかかって」流れが消えてしまうと述べた。その同じ所であたかも熱さや冷たさがひっかかって痛みを覚えさせたかのようだ。つまり、「氣」の流れを「掌当て」で感じている時、熱も鋭く流れるようになったと思われる。

ま と め

以上をまとめてみると次のことが先ず言える。掌を当てられると、一、呼吸が変化する（自律神経の動きが変化する）、二、意識の状態が変化する、三、顕著な運動が皮膚や身体全体に生ずる、四、様々な症状の改善が見られる、ことは事例から経験的に確認できる。また掌を当てている私に感じられる現象は「氣」の現象であり、掌を当てられる側にも同じ「氣」の流れる感覚が生じていることから「氣」が交流していると了解できる。この「氣」のモデルを、掌を当てられる側に生ずる先程の四つの経験的現象に当てはめてみるなら、〈掌を当てられると「氣」が流れ、呼吸が変化するなどの現象が生ずる〉と言い換えることができる。では「氣」が流れると何故かような現象が生ずるか。それについては今のところ説明できない。知識や経験がまだ不足していることは確かにしても、本来、私の作業は「氣」という根本原理を立ててそれで現象を何らかの形で説明しようとするものではないからだ。⁽⁸⁾何々だから、こうだという因果説明の鎖をつなげることも、現象を了解するモデルをもう少し精密にすること目指したいのである。そのためには、やはりもう少し経験をつむ必要があることは明らかであるから、本稿では、「氣」が他者と交流すること、その「氣」の交流が大きな影響を相手に生じさせることを確認したところで一区切りつけた。

注

(1) 前稿の内容、殊に「氣」の体験の部分については読者は既

に知っているものとして本稿は論述させていただく。

(2) 私が参照したものを一、二、挙げておくと、ハリー・エドワーズ『靈的治療の解明』図書刊行会一九八四年、E・G・フリッカー『奇蹟のドクター』日本教文社一九八二年など。

(3) 鍼や指圧を業とする人達が、ここで私が意図しているような意味での現象の記述をしているかどうか、不勉強でまだ分らない。ほんの微かだが参考になる記述が含まれているものとして次の二冊が管見に入った。宮城英男『気築体』新泉社一九八六年丸山敏秋『氣—論語からニューサイエンスまで』東京美術一九八六年。

(4) 直接は参照していないが、前記丸山、及び湯淺泰雄『氣・修業・身体』平河出版社一九八六年などにいくつか紹介がある。

(5) 「愉氣」は野口整体で用いる言葉である。呼吸と共に「氣」を「愉」^{ユキ}ることで、相手と交流し、活力を蘇らせようとする技術である。この言葉は「氣」を前提にしないと用いられないので、今回は用いない。又私は野口整体について良く知らないこともある。ただ日常的には便利な言葉なので、普段はこれを用いて物を考えたりしている。野口晴哉『整体入門』講談社一九七六年、同『愉氣法Ⅰ』全生社一九八六年などを参照してほしい。

(6) 本稿で出てくる、経絡指圧、経絡体操については前稿同様、増永静人『スジとツボの健康法』潮文社一九七五年を参照。

(7) 自律神経はイメージに影響されると考えるなら、掌を当てる側と当てられる側の対人関係についても考慮しなければならぬ。事例一は私の妻であり、事例二は私の母である。とすれば、私が掌を当て、たからではなく私が掌を当てたことこそ、深い呼吸

と関係しているかも知れない。それはありそうなことである。——全世界的に、悲嘆の時にとる姿勢と他者がそれを慰める時にとる姿勢とは、共通であるといわれている(アイブル・アイブスフェルト『プログラムされた人間』平凡社一九七七年参照)。慰める時には肩を抱いたり、背中に掌を当てたり軽くたたいたりすることばをかけることもあるがむしろ動作の添え物のようである。つまりエソロジカルな働きの方が強いのである。しかし、そのようにして親しく慰めてくれる人は多くは一定の人間関係の構造の中で特定の関係に立つ人であろう。エソロジカルな基礎の上に、人間の場合はその人に慰めてもらったという、対人関係のイメージの働きも大きい。従って、その人が背中に掌を当ててくれたことが慰めとして働くのであらうと考えられる。これと同じように、私が指圧をしたりつわりを軽くしようと思えば、これと同じように、むしろ家族的情愛とでもいうべきものに反応して自律神経の働きが変化するのも知れない。しかし理論的には考えられても實際上、そう大きい比重はないと思える。後述の事例三を参照してほしい。これは友人の娘である。なお、本稿で扱う事例が家族的関係の者に限られているのは理由がある。医療類似の行為を不特定多数の人に繰り返した場合は、たとえ報酬を受けとらずとも、医療関係の法令に触れる可能性がでてくる。私が事例をとれるのは、このような家族的关系に限られる。

(8) 「動物磁気」などという概念で説明しようとしたメスメリズムが対比的に想起される。メスメリズムについては、H・エンペルガー『無意識の発見・上』弘文堂一九八〇年を参照。

(ふじさき やすひこ・専任・文化人類学)